

松本清張『かげろう絵図』論

——三田村鳶魚との関わりを中心として——

三 谷 憲 正

- 一 はじめに——典拠資料をとおして
- 二 三田村鳶魚『御殿女中』から
 - 1 猫
 - 2 奥女中殺し
- 三 三田村鳶魚『大名生活の内秘』から
 - 1 田舎侍の石翁邸見物
 - 2 戯文
 - 3 石翁の最後
 - 4 お美代の後年
 - 5 日蓮宗の跋扈
 - 6 松代侯
- 四 おわりに——三田村鳶魚『江戸の女』より

この作品の魅力は作品世界を基底部で支えている史的な事実に基づいた緻密な描き込みに多くを負っている。作者松本清張はこの作品を構築するにあたり、どのような資料をどこにどのように使っているのだろうか。本稿の趣旨はこの典拠の支柱に三田村鳶魚の著作（『御殿女中』『大名生活の内秘』『江戸の女』など）が使われていたのではないか、ということを追求めたものである。

一 はじめに——典拠資料をとおして

松本清張の『かげろう絵図』（『東京新聞』一九五八〔昭三三〕・五・一七〜一九五九〔昭三四〕・一〇・二〇）は、寛政から文化文政期を経て天保に至る長い期間、將軍だった大御所家斉の、最晩年の一年間を時間軸に取り、佞臣たちの中でもとりわけ中心人物と目される石（硯）翁こと中野清茂をめぐって画策される陰謀に対し、無役の若き旗本新之助をはじめとして、陰謀を敢然と阻止する人々の活躍を描いた作品である。立ち向かう人々とは、二度目の寺社奉行となった脇坂淡路守、その友人と言っている島田又左衛門、そしてその甥である新之助、さらには又左衛門には姪にあたる魅力的なお縫（登美）などである。

『かげろう絵図』は、松本氏のこれまでの時代小説と、推理小説という異質のものを、一つのものに染めあげた成功作^①と言うのは小松伸六氏であり、また「作中人物の構図は、基本的には勧善懲悪の形であるが、最後には決して定まることのない権力の構造が暗示されて終る^②」^③と言っているのは奥野美友紀氏である。確かに、あたかも活劇の舞台を見ているかのような勧善懲悪の痛快なストーリーのみならず、また謎を深めていくサスペンスが網の目のように張り巡らされて綿密な構成を取っている点も大きく評価される作品

である言えよう。

しかし、この作品の魅力はそのような点からだけもたらされているのではない。足立巻一氏が「小説の舞台、背景とが主要な舞台となるが、その構造、制度にも小説の進行につれて適切な注釈が挿入され、時には諸文献の一節が引用されたりする^④」と指摘するように、実はこの作品世界を基底部で支えている歴史的な知見がもしなければ、しごく平板な作品に終始してしまったかもしれないのだ。その知見は、史的な事実に基づいた緻密な描き込みに現れている。これは一体どこから来たものなのだろうか。言い換えるならば、作者清張はこの作品を構築するにあたり、どのような典拠資料をどこにどのように使っているのだろうか。本稿の趣旨はこの典拠の支柱に三田村鳶魚の著作が使われていたのではないか、ということを追求するところにあるといつてよい。（なお清張に関する本文の引用は全て文藝春秋刊『松本清張全集』による。また引用に際し、改行などは煩雑さを考慮し、略した場合もある）

二 三田村鳶魚『御殿女中』から

1 猫

例えば、「25猫」の章（作品には章の番号はない。が便

宜的に振っておきたい。なお引用の傍線部は三谷、以下同じ)に、次のようなさりげない描写がある。これは大奥の年寄椋山の飼ひ猫についての描写である。

・椋山は猫が好きである。贅沢なもので、その猫の係りに部屋子が一人、つき切りだったが、猫は畳の上に寝ないで、椋山の裾の上に寝たり、特別にこしらえた猫の蒲団の上に寝たりした。管籠の中に、板縮縮緬の蒲団があつて、猫の寝床になつてゐる。

・この、おいと、という猫は、大そう躰がよく、部屋子などが、お下りものを与えても、ちゃんと自分の寝床に咬くへて行つて、そこで食べるという工合。

・猫の首には、紅絹もみの首輪に、銀の鈴がついてゐる。

一見なんの変哲もない一こまの叙述である。もし典拠問題に関心がなければ、後段で登美がこの椋山の猫を見つけることにより、大奥高級女中の寺院代参のお供に加わることでできたといった、伏線的なプロットとしての状況説明のように読み進めても不思議ではない箇所である。

しかし、これを次の一節と対照させてみたい。

・此の猫は十六年生きて居ました、直かに畳の上へは寝ません、旦那様のお裾の上へ寝たり猫の蒲団ふたんがありまして、その上へ寝たりしました、管籠くだかごの中に中幅ちゆうはくの板縮縮緬いちはぢりめんの布団があつて、猫の寝どこに拵しらへてありまし

た。

・我々がお下くだ(おさがりとは云はず)を頂いてゐる処へ来ますと、紙へ包んで遣ります、それを喰はへて、自分のお膳のところまで往つて食べます、なかくお行儀はいゝ。

・猫は紅絹の平紐ひらひもへ銀の鈴を付けて居ました、此の紐は一ヶ月づつで取換へます、

これは、江戸研究の第一人者とも言うべき三田村鳶魚の『御殿女中』(春陽堂、一九三〇〔昭五〕・五)に収録されている「御殿女中の研究」(二十四)からの引用である。すなわち第十三代家定の御台所天璋院てんしやういん(篤姫)に仕えた村山ませ子刀自やまざねから、鳶魚が得た聞書の一節である。「旦那様(天璋院)は狛けんがお好きであつたのですが、温恭院様(家定)がお嫌ひでしたから、猫をお飼ひになりました」と言う。実は家斉より二代あとの將軍家定の時代(嘉永・安政期)の話だつたのだ。

この二つの文章を対照させてみると、両者ともに「猫」は、「畳の上に寝ない」で、「裾の上に寝たり」「猫の蒲団の上に寝たり」している。また磨いた竹を枠はに嵌めて鶏などを入れる「管籠の中」に独特の染色法で作った「板縮縮緬の蒲団」を敷き「猫の寝床」を作つてやつてゐる箇所、あるいは「紅絹」の紐に「銀の鈴」を付けた首輪を「猫」

がしているところなどを比較してみると、鳶魚の一文を基に『かげろう絵図』の描写がなされていることがわかる。おそらくこの『かげろう絵図』という作品は、三田村鳶魚の著作とは深い関係があるように思われる。

では『御殿女中』の他の箇所はどう使われているのだろうか。

2 奥女中殺し

家斉に御墨附を書かせ、自分たちの栄華を守り続けたい石翁らの野望を挫くべく、旗本島田又左衛門によって差し向けられたのが、姪のお縫だった。次のエピソードも、お縫（大奥では登美と呼ばれた）に関わるものである。関わるどころか、登美が大奥の年寄佐島によって命を奪われる場面である。首尾よく、大奥の中樞に接触できるようになった登美は大御所家斉の病氣平癒の祈禱中に、呼び出され、乗物部屋に誘われる（「35 乗物部屋」）。

・長い廊下を歩いて、年寄の縦山がようやく足を停めたのが二の側の角の部屋である。

・縦山が指したのが、足を停めた角の部屋であった。

「お乗物部屋！」

登美は、その部屋を見て口の中で叫んだ。日ごろは用の無いところである。この部屋は奥女中が外出のとき

に使う乗物が四、五十も格納してある。長局の中には、こういう乗物部屋が五カ所もあった。

・縦山は微かに笑って、「なに、話は、すぐに済むことじゃ。お入りなされ」と杉戸を開けた。妙なことだが、その戸がすらりと開いたのだった。登美は、日ごろ、その戸に丈夫な錠前がかかっているのを知っているが、見るとそれが無いのである。前もって、誰かが抜いているのだ。

ここから登美の姿は人々の前から消えることになる。大奥の朋輩は騒ぎ出し、役人も交えて搜索が始まった。

・もしや井戸の中ではないかと、これも人夫が降りて鉤で探ってみた。井戸だけでも長局には二十五カ所もあるから大それた騒ぎである。また、局々の縁の下や、物置部屋なども搜した。

・添番頭が首を捻った。「こうなったからには、もう一度、乗物部屋を探すほかはない」

しかし、それは二度も探したのである。「いや。念のためじゃ。いちいちの乗物の内を調べるのじゃ」

・搜索は二の側の乗物部屋に移った。附添いの役人の前で、人夫が油たんをはずす。すると乗物の金具がうす暗い中にも光ってみえるのだ。ひとりの人夫が、網代鋌打ちの乗物の引戸に手をかけていた。

長局から一人の御殿女中が消えたのである。大奥の役人は必死になって探しまわる。改めて乗物部屋に入り、布や紙などに油をひき、水気や汚れなどを防ぐ覆いの「油たん」を取り除き、三度目の搜索を入れる場面である。順番に調べていき、ある人夫が一つの駕籠の戸をあけた。すると次のような事態を目撃する。

・彼は当然、内身なかみの空を予想していたから、平気ですつと引戸を開けた。突然、紅い色彩が眼にうつった。次には黒い女の髪がばらりと散って、うずくまった衣裳に藻のようにかかっているのが見えた。「ぎゃあ」人夫は仰天して、悲鳴を上げて転倒した。人々が駈け寄って、乗物の内をのぞいた。ひとりの女中が背を前に折り、押し込められたように静止していた。立派な乗物の中が死体の膝から底にかけて、どす黒い血で充滿していた。乗物の内で血塗まれになって死んでいる登美を一目見ると、添番頭は仰天して、御広敷番頭に知らせた。

読者は、陰謀を挫くため大奥深く潜入した若き登美の殺害された現場に遭遇し、ある種の落胆を禁じ得ないかもしれない。が、心苦しいことに研究はまた異なった方向からの見方を要請してくる。

右の一節を次の三田村鳶魚『御殿女中』に収録されてい

る「文政奇談夢物語」と対比させてみるとどうなるだろうか。

・文政四巳年六月の事也、おりう殿とて、御祐筆衆ヲ御勤被成御方の部やノ者也、御祐筆衆の出ばんは朝五ツ（午前八時）出なれば、いつも七ツ半（午前五時）時のおこしを頼て置故、例の通、御火のばん衆、七ツ半時通りにおこしたりと、おりう殿女中おき出たるが、其儘何方じかたへ行しや、相役の人、夜明るにおどろきおき出たるに、おりう殿もおどろき、五ツにも程なければ、食事もせずに奥へ出られたり、夫より段々さがしけれども、一かふに見へず、朝より終日さがしあぐみて、ぜひなく御役方へ願出したり、夜に入るより、御役人衆つぎとらにん添人夫入込、よく日は、廿五ヶ所の井戸、えんの下、つばねくの物置、乗物部やとも残るかたなくたづねけれども、さらに行衛なし、

『かげろう絵図』と異なり、『御殿女中』の方では、被害者は「おりう殿」であり、行方不明になったのは朝からである。しかし、『かげろう絵図』同様、搜索は「えんの下、つばねくの物置、乗物部や」と限なく行われ、「廿五ヶ所」ある井戸もその対象となつているところなどが注目される。

・四日目の日、今一度乗物部屋の乗物ヲ一々出し、乗物の中ヲ改べしとの事にて、大勢人足入込、乗物の上箱

ヲはづし、ゆたんにつゝみあるヲ一々取出し改ける所、

二の川(側)角乗物部やの藤島殿と申若年寄(若年寄は中年寄と同じ)衆のあじろびやう打の乗物の内に、惣身血に染て死し居たりと、早速御いし衆通り(来たことを通るといふ、奥通りといふは奥へ来ることなのだ)けれども、中々いつの事に死たるか、よほど時も立たる様子にて、血はくろくなりて死していたるよし、先生(まうい)ている分にて駕に入下(いれさ)ゲたり、

遺体のあつた乗物は、両者とも「網代鉦打ちの乗物」でもある。その中で、『かげろう絵図』は「どす黒い血で充滿」「血塗れになつて」とあり、『御殿女中』では「惣身血に染て死し居たり」「血はくろくなりて死していたる」となつてゐる。また「今一度乗物部屋の乗物ヲ一々出し、乗物の中ヲ改べし」(『御殿女中』)と、「もう一度、乗物部屋を探すほかはない(…)いや。念のためじゃ。いちいちの乗物の内を調べるのじゃ」(『かげろう絵図』)と比べてみると、まるで口語訳であるかのように対応しているのがわかる。

・長つぼねの内に乗物部やは五ヶ所有、何方も、乗物七八十づつも入有也、入口ニヶ所づつ付有、丈ぶなる錠前有、日々封印改有所へ引入、まして外箱かかり有乗物の内へ入たる事、いづれ妖怪のわざならん、恐ろし

き事也、

長局には「乗物部やは五ヶ所有」といい、その部屋は、「二の川(側)角」にあり、部屋には「丈ぶなる錠前」が掛かつてゐる点も同様であると指摘できよう。

ただ当然ながら若干の違いは存在する。例えば、『かげろう絵図』の登美は「祈るようになつて坐つてゐる」が、『御殿女中』での「おりう殿」は「乗物の中にて、あをのけになりて死していたるに、かくし所(ま)あらわにして出していたり」という姿勢の違いなどである。

しかし他の箇所より、『かげろう絵図』の登美ことお縫の殺害事件の典拠は、三田村鳶魚の『御殿女中』から取られてゐると判断していいように思われる。

では、鳶魚の他の著作はどうであろうか。

三 三田村鳶魚『大名生活の内秘』から

1 田舎侍の石翁邸見物

『かげろう絵図』「11 密謀」の章に石翁に関する次のような挿話がある。幕府本丸の老中でさえ憚る石翁の邸宅を植木屋と間違えて入り込み、庭の見学させてもらったうえに、縁に上がり、お茶のみならず酒まで振る舞われた田舎の侍二人の話である。『かげろう絵図』では、無遠慮に闖入してきた田舎侍と邸の主とのやりとりを次のように描い

ている。

・主人らしい坊主頭の隠居がこれを見て、騒ぐ下男どもを制し、ゆつくり見せてやれ、と云った。侍二人は見物に廻ったが、想像以上の広さと立派さに肝をつぶした。なるほど、江戸というところは広大なものである。どこに何があるか分からない。二人は方々、見て歩き、もと来た道に出ると、池に臨んだ立派な家の縁の前に大石があり、その上に前の坊主頭の老人が腰をかけている。

「まことに見事なお手入れで愕き入った。これで国への土産が一つふえました」

と礼を云うと、老人は茶をのんで行けという。出された菓子は味わったこともない上等のもので、茶器も豪華である。あきれていると、貴公たちは酒を飲まれるか、と老人は云った。

「頂戴仕る」

と答えると、それでは、と縁の上にあげられ、酒香の馳走にあずかった。これがまた珍味ばかりで、田舎待はいよいよ舌を巻いた。

これを、三田村鳶魚『大名生活の内秘』（早稲田大学出版部、一九二一〔大10〕・三）の「帝国大学赤門由来」中「蒼くなつた新五左」の一節と対比させてみたい。

・主めける道服着たる法師が是を見て、今の言葉に相違もあるまじ、苦しからず、こなたへといひて入り、廻りくて元来し道のほとりに来て見れば、池に臨みたる家の、美を尽して作りたる縁前に大石を置、先の法師が縁にこし打懸けて居にけり、扱もく見事なる手入かなとたへてければ、これにて茶一つまゐるべしといふにぞ、辱しとおし並んで腰かけたり、

・法師もよろこべる様にて、酒まゐり玉はんやといふにぞ、元より好める所とこたへければ、いざといひて縁に上れば、先の女の童が、酒壺、酒づき、其外いろくくの酒肴持出たり、

「新五左」とは無粋な田舎武士を侮蔑するという語である。

この新五左二人が有力大名でさえ、気を遣わざるを得ないほど、今をときめく石翁の邸で縁側にこのこの上がり、お茶やら酒やらを振る舞われるのだから、話はおかしい。

だがそれで終わらず、二人は帰り際にまた大きな失態を演じてしまう。『かげろう絵図』ではそれを次のように語る。

・ついでには江戸の風習として茶代を置かねばならないが、これはほんの心づけであると侍は云って、いくらかの小銭を紙につつんで出した。坊主頭の隠居は別に拒みもしないで受け取った。侍はそれで安心し、これほど

の家は江戸でも滅多にあるまいから、次には友達を呼んでもいいか、と訊く。老人は一向に構わないと答えた。それでは家の名を教えてくださいと云うと、老人は、これを持っておいでなさい、と云つて何か書いたものをくれた。

大藩の家老が千両箱のつまった長持ちで賄賂を運び込む邸に、植木屋と間違え「茶代」をおいていくのである。ここは『大名生活の内秘』では次のようになる。

・一人がいふ、かく迄もなしぶりよきに、如何なる謝儀の計らひにして帰らんといへば、今一人がいふ、吾聞及びしは、江戸の風として茶を乞ひたらんには茶の価を取らせ、酒肴を出したらんには酒肴の価をとらずとこそきく、かゝる富貴めける家にも、其価はかはることなし、吾計ひ侍らんとて、懐中より細金こまがね一つ取出て紙におしつゝみ、これは少し計りなれども、いさゝか先程よりの謝儀として、二人の者より送り侍るとて差出しければ、法師はいなみもやらず、心づかひなし給ひそ、とて火入箱の上に置きけり、

・一人がいふ、かく迄によき主ぶりの家は又なきを、再び来たりて訪ひもし、又何某々々など打連れて来らんに、家の名を問ひ侍らでは叶ひがたしとて、家の名をとひしに、法師がこれ持玉へとて札紙にかきし物を出

せり、

確かに違はるところどころある。例えば、『大名生活の内秘』ではこの「法師」が受け取つた「細金」を、煙草のための火を入れておく小さな器の「火入箱」の上に置く点などは相違と言へば言えないことはない。しかし、傍線部に注目してみると、鳶魚のこの一文を踏襲するようにして清張は文章を綴っているのがわかる。

騒動は翌日起つた。『かげろう絵図』ではこのようにその騒ぎを記している。

・翌日、二人の侍は出仕して、同藩の者と話しているうちに、昨日の物語りをした。あんな立派な庭の家を見ることがない。主人と約束したから、お望みなら案内しようと言つた。聞いた連中が、それは誰の家かと尋ねると、あいにくと貰つた書きつけを自宅に忘れたのでよく覚えぬが、座敷の鴨居の上に、石摺りにした大きな文字の額が掲げてあつた、何でもその一字は「碩」というような字だつたと思うと語つた。

・それはまさしく中野石翁の邸である。知らぬといながら、植木屋と間違えて藩士が無礼を働いたのだから、どのような仕返しがあるか分からない、と藩主はじめ重役一同が蒼くなつた。一先ず、その勤番侍二人を押し込め処分にして、謝罪の使者を石翁のところへすぐ

に立てた。(波線は三谷、以下同じ)

無知と言えばそれまでだが、目に見えるような滑稽譚になつてゐる。この一節は『大名生活の内秘』では次のようである。

・明けの日は国主の館につかへまつる日なりければ、二人の者も出で、諸人と様々の物語する中に、扱も昨日の遊び程面白かりつることは覚え、隅田川の堤は絶景に待れども、殊に勝れたるは、植木の花作りが家の園なり、そが中にも白髭の社のこなたなるあたりに、殊に勝れたる植木師がり立よりて、酒肴のもてなしに預りたるは、又なく心よく覚ゆるなど語るに、諸人問ひ侍りて、その家は何とかいふ家ぞといふに、一人がいふ、

・かくて二人のものをば先家におしこめ置きて、国主には告げ、重役のつかさ人より使者もて、隅田川づゝみの館に言入けるは、国主の家の者なるが、今度国より出たれば、物のわきまへもなく、昨日御館に推参して、上なき無礼に及びしよし申出侍るにより、二人ともに家におしこめて置て候が、いよくさあらんには、如何なる刑に行ひ申べきや、(…)先の二人が申つる法師、しとねの上において、きのふ来りしは田舎の人なるべきが、庭の草木見んと望むに任せて、ゆるして

見せたるなれば、決して無礼のことなし、おしこめ置たりとは大なるひがごとなり、国主の耳に入べき理りなし、とく帰りて此趣申聞けべしとて帰しける、

『かげろう絵図』の「聞いた連中が、それは誰の家かと尋ねると」は、「諸人問ひ侍りて、その家は何とかいふ家ぞといふに」に対応しているだろうし、また「あいにくと貰つた書きつけを自宅に忘れたのでよく覚えぬが、座敷の鴨居の上に、石摺りにした大きな文字の額が掲げてあつた、何でもその一字は『碩』というような字だつたと思うと語つた」は、『大名生活の内秘』での「札紙しるせし名を請取たれども、家に残しおきたれば思ひ出でず(…)座敷の鴨居のうへに、石摺にしたる大文字を額に張りて懸けたるが、主じの名かと思ひ侍る、しかしとくとも覚え侍らねども、石へんに頁したる字と、いま一字は忘れたり」に相当するだろう。このように傍線部を並べてみると、確かに鳶魚の著作が典拠資料になつてゐると判断して差し支えないように思われる。

その上で、相違に留意するならば、『かげろう絵図』では藩士の過失に「藩主はじめ重役一同が蒼くなつた」にもかかわらず、資料の方では「国主には告げで、重役のつかさ人より使者もて、隅田川づゝみの館に言入ける」となつてゐる点であろう。つまり『絵図』の方が藩主をも巻き込

んだ一藩を挙げての事態收拾となっているのである。

なお、この話は鳶魚によると「御書物奉行で名高い鈴木岩次郎白藤の長子孫兵衛桃野といふ昌平黌の教授が書いた」とあるだけで、例によって出典名は記していない。が、鳶魚の編んだ江戸期の随筆集『鼠璞十種』第一（国書刊行会編、一九一六（大5）・四）を見てみると、酔桃子「反古の裏書」三の「隅田川の見物」に出ていることがわかる。しかし、清張がこの「反古の裏書」を基にしたと見るよりは、直接参看したのは『大名生活の内秘』の方であろうと推察される。

2 戯文

三田村鳶魚『大名生活の内秘』には、他の作品、たとえば『大奥婦女記』『献妻』の資料の一つになったかと思われる、綱吉の家臣牧野豊後守の話なども含まれているが、やはり異彩を放つのは、十一代將軍家斉に関する「大御所様」の章と家斉の愛妾お美代に関する「帝国大学赤門由来」の章であろう。前節の田舎侍の話だけでなく、次に述べるエピソードもやはり、この「帝国大学赤門由来」から取られている。

『かげろう絵図』の終わりに近い「42 大御所他界」にこのような「戯文」が出てくる。

・文恭院と諡号のついた家斉の死去後、一カ月と経たぬうちに、江戸市中には戯文が出た。落書は、口を塞がれた庶民が、精いっぱい洩らす感情の捌け口である。

思召これから先は出ぬなり 奥向

内願ごとも止むが重畳 取計

向島石の隠居も淋しくて 権門

おみよもろ共法華三昧 妙法

連歌に擬した戯文である。思召というのは、家斉が隠居して大御所になったが將軍家慶に対して実権を渡さず、思召という形式で家慶をおさえたことを云う。西丸奥女中が内願といって勝手な要求を持ち出し、それがたいてい「大御所様思召」に化けて、本丸を悩ました。家斉が死んだら、その悪弊もなくなるだろう、との風刺である。

石の隠居は、むろん石翁のことで、凋落の暁は、これも大奥を逐われるお美代の方と、法華太鼓を叩いているほか仕方があるまいとの揶揄である。

これはほぼそのまま「帝国大学赤門由来」中の次の一節に呼応する。

・天保十二年閏正月三十日、六十九度の春を祝した後、お世辞に云はれる千秋万歳を、真に受けて居たのかも知れないが、遂に、文恭院といふ諡号を受けることに

なられた。直ぐに、吉例の連歌に擬して、戯文が出来た。其の中に、

思召是から先は出ぬなり

内願事も止むが重畳

向島石の隠居も淋しくて

おみよもろ共法華三昧

とある。大御所様は隠居したのだけれども、思召しに

よりといふ触れ出しが、色々な控制を新將軍に加へた、内願といつて、西丸女中が種々な要求を持ち出す、それが大抵思召しに化けて幕閣を悩めた。石の隠居は、

お美代の方の養父中野播磨守が、隠居後に石翁と云つて、向島に別墅を拵へて居た、(◎は原文のママ)

四つ目の句の解釈に関しては、『かげろう絵図』の方がわかりやすくなっているものの、傍線部に着目すれば、ほぼ同文といつてよいことがわかる。

3 石翁の最後

このように資料を尊重し、忠実に依拠する形で綴られている箇所は先の戯文についての一節だけでなく、石翁の最後に関しても見られる。「42 大御所他界」では石翁の没落を次のように描いている。

・家を壊す音が聴える。樹を挽き倒したり、塀を崩した

りして、さまざまな音がしていた。土運びをしているのは、広大な池を埋めている連中だった。厄介なのは、大小無数の庭石で、人夫どもが懸け声をかけ、地面から掘り出して倒しているのだ。それを何処かに捨てにゆく組もある。石翁は、立って、それを眺めている。

(一夜明けたら、この屋敷も田圃だ)

石翁は爽快な気がした。負けた、となると未練を残さぬ男だった。さしも、数寄と壮大を誇った向島の屋敷を、いま、一気に叩き壊しているのである。

・(何もかも無くなつてしまえ)

一どきに数千の人夫を集めたのもそのためだった。癩性な男だけに、一刻が我慢できなかった。夜が明けるまでに、田圃にするつもりなのである。

・それから、七カ月経つた天保十三年五月十二日、石翁中野清茂は七十四歳にして没している。牛込七軒町仏性寺に葬られた。法名は高運院殿石翁日勇大居士。

この箇所は同様に鳶魚『大名生活の内秘』の「帝国大学赤門由来」の一節「国芳の錦絵」の次の説明に対応している。

・中野は天保十二年五月十五日、享保寛政の御趣意に依つて新に改革される趣を発表されると、数寄を尽した向島の別墅を一夜の中に破壊して、翌朝は畑地にした。了つた、癩癩紛れでもあつたらう、遅れて察度さうどされるよ

りも一ト足お先へのつもりでもあつたらうが、気味のいゝことをしたものである。そして越前守の蹉跌よりも先に、天保十三年五月十二日、七十四歳で没して、曾て大奥女中を籠絡した牛込七軒寺町の仏性寺へ葬られた、

・高運院殿石翁日勇大居士といふ法名も、過去帳の上に残つたばかり、数多い墓石は売払はれたとやら、さしも化政時代に豪奢闊達であつた大御所様の寵臣も、權威に誇つた時だけの人、今では誰も記憶して居ない処か、香火を供する子孫さへない。

「一夜」にして広大な邸宅を壊し、「天保十三年五月十二日」に「七十四歳」で「没して」「牛込七軒寺町」の「仏性寺」へ「葬られた」のだという。資料との対比から言えば、鳶魚にほぼ全面的に依拠しているのがわかる。しかし、語り手は石翁の心中に入り、その内側を吐露しつつ、一夜にして広大な邸宅を壊す描写は鮮やかである。このような点がやはり資料とは異なり、『かげろう絵図』が小説たる所以でもあろう。

4 お美代の後年

資料に依拠するという点では、石翁の養女お美代の後年に関して、同様である。『かげろう絵図』42 大御所他

界」には家齊の愛妾であつたお美代について次のように述べている。

・お美代の方は、本郷赤門の御守殿の内に暮していたが、やがて実の女、溶姫がお国入りとなつて加賀の金沢へ去つたので、仕方なく次の女末姫の縁先、浅野家の霞ヶ関の藩邸に引き取られた。しかるに、末姫もまた、本国芸州広島へ往つたので、やむを得ず、また加州の本郷邸に扶助を頼む身となつた。加州家でも、知らぬ顔が出来ぬから、下谷池の端に一戸を借り入れ、お美代の方を住ませた。その間に、溶姫も金沢で死んだので、お美代の方はいよいよ心細い身となつた。それでも、前田家ではお美代を本郷無縁坂の一寺に移して、明治初年まで女中七名をつけて世話したという。

以上の一文を、これまで資料として掲げられた『大名生活の内秘』の「帝国大学赤門由来」中の「法華駈け込む阿弥陀堂」の一節と比べてみたい。

・赤門の内に封じ籠められたお美代の方は、御本丸を逐はれて一年の間に、実父の日啓が牢死し、養父の石翁も死んで了つた、闇中飛躍にも失敗したが、外孫に当る犬千代丸は十四代將軍になれなくつても、居ながら百万石の相続人なのを思ひ出に、是から後の月日を暮した。然るに溶姫様は御国入りになつて、遠く加州金

沢へ往かれる事になり、余儀なくお美代の方は赤門を出て、末姫の扶持を受けることになって、霞ヶ関へ引き取られたが、間もなく末姫も本国芸州広島へ往かれるので、頼む木陰に雨が漏る。詮方なしに、本郷邸へ扶助を願ふ身の上になった。加州家でも棄て置けないから、下谷池の端に住む奥坊主平井善朴の家を借り入れ、お美代の方を任はせて置いた。この間に溶姫も金沢で逝去され、蜃気楼の消えるやうに幕府も亡びて、無禄移住の旗本御家人が住み慣れた江戸を離れて、駿府へ往つて了つた後の淋しさ、見渡す世間の有様も、お美代の方と御同様。それでも加州家では明治二年の四月からお美代の方を本郷無縁坂の講安寺に移し、足軽二人昼夜寺内へ詰め切りといふ待遇。(…)零落したお美代の方は御厄介になる時代がきても、付女中の七人も使つて居た、

二つの引用を比較してみると、鳶魚の方が分量も多く、詳しく叙述している。一方清張作品では細かい固有名詞や説明を略し、事実を伝えるような書き方をとっている。が、ほとんど引き写しに近い形で使っているのが理解できよう。

5 日蓮宗の跋扈

このようにみると、三田村鳶魚の『大名生活の内

秘』の中でも特に「帝国大学赤門由来」の章は、使い切っているといつても過言ではない。ここで留意されるのは、『かげろう絵図』に典名が明示された引用に関してである。本文「35 乗物部屋」に次のような説明の後、ある資料が引かれている。

・ 一体、武家の宗門は殆どが浄土宗、禅宗だったのが、家斉の代に、法華への宗旨変えを申し出た大名もあつたくらい、法華宗は諸家に人気があつた。いうまでもなく、これは家斉への阿諛であり、お美代の方をはじめ、その大奥側近への追従だった。先祖以来の宗旨をかえなければならかつたほど、法華のうちわ太鼓を鳴らさないと、立身も出世も出来なかつたのだ。

「西御丸を始め、諸大名の奥女中、多分は日蓮を信仰せられ、はては我生れ来りし先祖より伝ふる所の宗をすて、此宗にゐること、古今同じく、其数甚多し。是も宗の僧のすすむる所にして、又、先々の女中たがひにすすめあへるが致す所也」

また、こうも書かれている。

「近世諸家の貴人、京都より妾を召さるるに、多くは日蓮宗なり。その故は日蓮宗の僧等、其の檀那と心をあはせ、下賤の数ならぬものにも、かほよくむまれし処女あれば、金錢を与へ、育てしめ艶芸を習はず。年や

やたけゆくとき、日蓮宗の法義を教へ侍る。是は若し
大家の妾となり、幸ひせられれば必ず主家を勧めて、我
宗を其邦へひろくせんたくみ也。邪徒の奸曲ここに至
れりと京の人かたりし」(天野信景「塩尻」)

作品の本文を素直に読むかぎり、まず語り手は法華宗がお
美代との関わりで流行していたことを述べ、その例証とし
て、「西御丸を始め、諸大名の奥女中」が日蓮信仰に靡い
ていることを示すある資料を出す。一旦そこで切り、次に
「また、こうも書かれている」という一行を置き、「近世
諸家の貴人」の妾が教えこまれた日蓮宗を宣布している世
相を写し出している資料を引き、それが天野信景の「塩
尻」だというように構成されている、と判断せざるを得な
い。つまり前後に引用されている資料は同一のものであり、
それは随筆の「塩尻」だと読むのが普通ではないのか、と
いうことである。

しかしこれを典拠という観点から見直してみると、別の
様相を呈することになる。まず、これまで度々触れてきた
三田村鳶魚『大名生活の内秘』の「帝国大学赤門由来」の
中に収められている「落語のような皮肉」に次のような資
料が引用されている。

・まだ大御所様の西丸が時代の花であった頃、竹尾善筑
が「西御丸を始め、諸大名の奥女中、多分は日蓮を信

仰せられ、はては我生れ来りし先祖より伝ふる所の宗
をすて、此宗に在ること、古今同じく、其数甚多し、
是も宗の僧のすゝむる所にして、又、先先の女中たが
ひにすゝめ逢へるが致す所也、然るに、愚按には、法
の通塞は凡人のはかりうたがふ所にあらず、定て、其
女中前生に法華を信受し結縁ある事、今日の女中方の
ごとし、(….)といった。

傍線部の竹尾善筑とは江戸中期の勤王家である山県大弐の
孫で、考証家だったという点は措くとして、鳶魚の「帝国
大学赤門由来」中「おみよの方」の節に引用されている資
料に注目してみたい。

・道楽坊主でも親父なのだから、売僧日啓の運勢を開く
ことになった、爰で思ひ出すおんは、正徳年中に天野
信景が書いて置いた塩尻の一章である。『近世諸家の
貴人』京都より妾を召さるゝに、多くは日蓮宗なり、
其故は日蓮宗の僧等、其の檀那と心をあはせ、下賤の
数ならぬものにも、かほよくむまれし処女あれば、金
銭を与へ育てしめ艶芸を習はず、年々、たけゆく時、
日蓮宗の法義を教へ侍る、是は若し大家の妾となり、
幸ひせられれば必ず主家を勧めて、我宗を其の邦へひろ
くせんたくみ也、邪徒の奸曲こゝに至れりと京の人か
たりし。』お妾伝道は浄土宗に塊つた天野の筆だけに

安心して請取れもせぬが、元禄以来江戸の仏教界は、浄土宗日蓮宗の分野であつた、柳営のみならず諸侯の奥向にも不思議なほど、団扇太鼓党が多かつた、ここで鳶魚の引いているのが天野信景の『塩尻』である。

しかし『かげろう絵図』では、前者は竹尾善筑の著作から、後者は天野信景の『塩尻』と、異なつた人物の別々の資料をつなげて作品に織り込んでゐる。前者竹尾善筑が何に書いているのかその典拠名を鳶魚は出してきてはいない。が、本稿「1 田舎侍の石翁邸見物」の節の終わりで触れた三田村鳶魚編『鼠璞十種』第一（国書刊行会編、一九一六（大5）・四）に当たつてみると、覚斎竹尾善筑の著作「即事考」の三に「○女中方日蓮宗」として「西御丸を始め諸大名方の奥女中」からはじまる一文が掲載されている。鳶魚が依拠したのは、「即事考」であつたのだ。しかし、この江戸期の随筆を通読しそこから拾ひ出していったとするよりもむしろ、ある著作（ここでは『大名生活の内秘』）に引用されている二次的な資料を借りて作品に挿入し、物語を構築している、と見た方がいいように思われる。

同様に、『塩尻』は室松岩雄校訂編輯により、一九〇七（明40）年十一月、國學院大學出版部より刊行されているので、作者清張が繙読することは可能であり、事実読む機

会はあつたかもしれない。しかし、典拠名が明示されているからといって、直接そのものに当たり、それが典拠になつてゐるとは考えなくともいいように思われる。例えば、『塩尻』の引用であれば、この話は「巻之五十四」に「京より諸家へ召抱らるゝ妾」とある項であることは間違いない。が、このような大部な随筆集を読み進め、ここにひとつあそこにひとつと溜めていったと想像する必要はないであらう。

このような点にこだわるのは「孫引き」なのでいかなものか”などという地点に話を持って行こうというのではない。直接体験であろうと間接的なそれであろうと、文学作品の課題はそれらを使い、いかにして言葉によるリアリティを獲得するかにあるとすれば、直接資料に拠つたか、それとも二次的な資料で書いているか、といった裁断の仕方は語るに足らない問題である。ここではただ、作者の「方法」を探りたいだけである。もしある著作の中に引用されている資料を使うという「方法」が確認できれば、資料の掲載されているその著作を当然見ていたことになる。したがつてその著作の他の箇所も参看していたと考へるのが自然であらう。例えば、『かげろう絵図』冒頭「1 吹上」の章に江戸城吹上の庭の説明として「目出度水の末は清き流れにて、杜若、おもだか、其ほか水草あま

「たあり」と引用され、出典は「樹の下露」と記されてはいない。しかし、これは「樹の下露」という書物から直接取られたのではなく、多分、吉田東伍の『大日本地名辞書』（富山房、一九〇三〔明36〕・一〇）の「吹上御苑」の項に引かれている「樹の下露（新見伊賀守正路文化十年作）」の一節⁸から取られていると推測される。もしそうだとすれば『大日本地名辞書』の「吹上」の項、及びその周辺も目にしてきたと考えておいていいと思われる。

先の日蓮宗の跋扈を語る一節で作者清張が妙な引用の仕方をしてしまったのは、前者竹尾善筑の方は鳶魚が典拠を明示していないので、もし出すとしたら著者名だけになっ
てしまい、後段の「天野信景『塩尻』」を出すこととの間に整合性を欠く点を考慮したためではなかったのか。とすればこの際前者の場合は省いた方がいい、という判断が働いたからだったのかもしれない。

6 松代侯

既に触れたように、三田村鳶魚『大名生活の内秘』、中でも「帝国大学赤門由来」は「頭の先から尻尾まで」利用されている。これまで述べてきたところは一対一の生の対応と言ってもよい箇所であった。が、そのような引用に近い用いられ方よりもさらに重要な利用の仕方は、咀嚼し消

化され作品に溶かし込まれたような使い方のほうではな
ろうか。

そうした消化された形で描写されているのが、松代藩の賄賂の話であると思われる。すなわち「11 密謀」の章に加賀藩前田家の用人奥村大膳と石翁こと中野茂清とが密談をしている場面がある。そこに廊下から「真田信濃守様、ご使者が参られました」と声がかかる。すると石翁は「信濃め、頼い奴だ」と舌打ちをする。すかさず奥村大膳は「松代侯がどうかされましたか？」と問う。

・「この間から、老中になりたいなどと申しては世話を頼みに来ている」

「ははあ、世間の評判はよろしいように承りました
が」

「それよ。それでのぼせたものか、いきなり老中を志望しおった。信濃は、まだ大坂城代も京都所司代も勤めては居ぬ。それを一足とびに老中にしろというのだ。人間は利口でも、のぼせると前後が分からぬとみゆる
の」

・「見込みが無いような、有るような、どちらともつかぬ返事をしている。大膳、この辺のかねあいが大切じや。信濃めは何とかおれに承知させ、出世の夢を遂げたいものと度々使者に時候の見舞品を持たせてくる。」

これが莫迦にならぬ金でな。その注ぎ込んだ金のため、貧乏世帯の松代藩では家中に渡す扶持米給金に差し支えていそうじゃ」

このエピソードはおそらく、次の「帝国大学赤門由来」の「向島の石隠居」の一節を踏まえて創作されていると思われる。

・猟官運動は賄賂の盛行を来し、それが大御所様の寵臣に向つて集中する。旗本御家人の猟官運動の贈賄は多寡の知れたものである、中野は大名の猟官運動を補助した、真田信濃守幸貫は白河翁の外孫で一寸評判男おとこだったが、未だ定例ぢやうれいの京都所司代か、大坂城代かを勤めない内に、老中にならうとして中野を頼んだ。

松代藩は貧乏であつたのに、中野が心安く引き受けたので、借財までして頻に賄賂を搬はなんだ、家中へ渡す扶持米給金に差支へる程注ぎ込ませた上に、中野はお気の毒だが先例がない抜擢ゆゑ、周旋いたし兼ねると逃げた、先例のないのは初めから知れて居る、何か一物あつて松代を絞つたのであらうが、大名でも斯うした目に逢ふ。

『かげろう絵図』の「その注ぎ込んだ金のため、貧乏世帯の松代藩では家中に渡す扶持米給金に差し支えているそうじゃ」と、「帝国大学赤門由来」の「松代藩は貧乏であつ

た」「家中へ渡す扶持米給金に差支へる程注ぎ込ませた」の二つの文を対比させてみると、語句に関しては同じものが使われているのがわかる。しかし、鳶魚の一文が説明であるのに対し、『かげろう絵図』は登場人物同士の会話の中に溶かし込まれ、描写として再生しているのがわかる。資料を使うという場合、「」を付ければ引用と言つていいような生に近い利用の仕方もある。が、ここに描かれているように物語にくくり込まれ、腑分けのしにくい使われ方こそが、実は文学的には重要度を増すとと言えるかもしれない。なお松代藩真田信濃守のエピソードは『天保図録』でも触れられている。

四 おわりに ―三田村鳶魚『江戸の女』より

先に述べたように、腑分けが難しいものの方が、かえつてその物語の根幹に関わるとするならば、三田村鳶魚『江戸の女』（早稲田大学出版部、一九三四〔昭9〕・一一）は更に重要な資料だと考えられる。

この物語は、「現將軍家慶大御所に、世子家定を將軍に、その後嗣に前田大納言犬千代を迎えて世子に直す」（16 お墨附）という陰謀が根底に横たわり、そのため如何にして家斉の御墨附を手に入れるかが大きなヤマ場となっている。言うまでもなく、前田犬千代とは、石翁こと中野茂

清の養女お美代の娘、すなわち家斉の子供、浴姫が加賀藩主斉泰に嫁ぎ、その嫡子として生まれた子供である。石翁からすれば曾孫にあたる。陰謀は、現將軍の家慶を大御所という実権のない隠居に祭り上げ、病気がちの世子家定を將軍に付けるといふものであった。その世継ぎに、お美代の娘浴姫の子を持つてくれば、石翁をはじめとし、水野美濃守忠篤、西の丸老中林肥後守、御側衆美濃部筑前守ら一派の地位は安泰と踏んでいたのであった。

だが、それを阻止する脇坂淡路守側は、お美代のいる大奥の紊乱、すなわち大奥高級女中と法華坊主との乱れた關係を突くことにより、お美代一派の排撃を試みた。そこで敵地の大奥深く潜入したのが、登美ことお縫であった。彼女の父は石（硯）翁中野播磨守清茂に遠ざけられ、閉門のち、不幸にして死んでいた（「5 貂の皮」）。この若きお縫が大奥の高級女中と法華宗感応寺の坊主との恋文という証拠を見つけ出すべく、危険な任務についているのだった。しかし、この設定はすでに『大奥婦女記』の「10 ある寺社奉行の死」という短編で脇坂淡路守安董が感応寺の事件を摘発する際に、家来の一人上田五兵衛の娘「たみ」を大奥年寄瀬山に「お蘭」として奉公させ敵情を探らせていることと軌を一にしている。機密は「知るとしたら、たみ自身が身をもつて探った結果であった」（傍点は原文ママ）

と語り手は述べていた。

実は、これは三田村鳶魚の『江戸の女』（早稲田大学出版部、一九三四（昭9）・一一）の「稼ぐ御殿女中」―「希有な女探偵」の章で示されていた史実であった。ただし、それは「延命院事件」に関してである。

・脇坂淡路守は決心した。坊主の策動を押しへなければ、如何なる珍事が出来するか知れぬ。（…）然し寺社奉行といふ御役は譜代大名が出世の階段を踏み出す第一歩で、京都所司代が大坂城代かを経て老中になる道程の最初だ。脇坂安董も播州竜野城主五万八千九百九十石の殿様で、寛政三年八月就任したのである。だが町奉行とは違つて役目についての属僚がない。与力同心はなく、一切自分の家来に用弁させる例なのだ。事件が事件だけに犯状が得難く、本より八丁堀の同心のやうに放線状をなす探偵機関がない。縦しや手先や同心があつたにしても、隔絶した寺院内で御殿女中の稼ぐのを明白に知ることは望まれない。まして寺社奉行には其の辺の施設がないのだから、何とも手の付けようがないのだ。

寺社奉行は捜査機関を持っていないので、動きが鈍い。勢い家臣を使うしか手がないのだった。しかし、相手は大奥という男子禁制の特殊な一郭である。

・其処を不思議な女探偵が出て来て、延命院の一切の秘密を知悉した。職務である八丁堀の連中にさへ出来な
い大手柄、それが何者かと云へば、脇坂淡路守の家来
の娘、君命の重さに一身を棄て、掛つて、見事に成功
はしたものの、竜野藩では此の娘の忠義一途に働いた
功績を陞表することさへ出来ず、本人は勿論、その
父兄の氏名を厳秘に付すよりほかに仕方がなかつた。
我等が聞いて居るには、この娘は事後に自殺してつ
たといふ。

この「女探偵」は、鳶魚によれば、「脇坂淡路守の家来の娘」であり、「一身を棄て、掛つて」成し遂げたという。が、後段でも「貞操を資本に任務を果し、その身命を抛棄している」と述べられている。

一方『かげろう絵図』の「34輪」に、島田又左衛門が脇坂の役宅を訪問し話をしている場面がある。脇坂淡路守が敵のもう一つの牙城である前田藩の本郷から茶会の招きを受けているという話を聞き、又左衛門が止めようとする。寺社奉行脇坂淡路守は次のように言う。

・「いや、お手前の忠告はよく分る。しかし、又左殿、お手前の姪御でさえも女の命をかけて働いてくれた。わしがじっとしている訳にもゆかぬではないか」
「お言葉ですが、姪は女でございます。寺社奉行のお

手前さまとは重味が違います」 「同じだと云つて貰おう」 寺社奉行は云い切つた。

このような会話を讀むと、これが如何にもこれまでのストーリーの延長線上にあるように見えながらも、実は鳶魚が『江戸の女』の「稼ぐ御殿女中」で述べた「女探偵」の話が大きな骨格となり、お縫が形象化されているように思われる。

しかし、お縫が「女の命」（「20 秋気」）をかけて探り出し、最後には殺されてしまう働きも、この物語の中では石翁一味を追い落とす力学になつてはいない。お縫のみならず、新之助たちの活躍はあつたものの、それが佞臣たちの没落に直接関与していたわけではない。足立巻一氏は先の解説で「罨」という言葉が随所に出てくる点を指摘している。が、より重要なのは「敵」という語ではなからうか。正義を体現しているはずの脇坂派も、悪の石翁一派も、相互に相手側を「敵」と呼んでいる。つまりここに善、悪ともにも相対化された構図を讀み取ることは難しいことではない。おそらくこの物語は、権力という悪と対決する人々を描くという勧善懲悪のストーリーを踏襲しながらも、正義も悪も歴史の中では交換可能なものであり、悪が倒れるのは一個人の活躍などではなく、善悪とは異なつた別の力学が作用しているのだ、という点に収斂して行くのではな

ろうか。

注

- (1) 小松伸六「解説」(『かげろう絵図』下巻、新潮文庫、一九六二(昭37)・九)
- (2) 奥野美友紀「かげろう絵図」(志村有弘編『松本清張事典』、勉誠出版、一九九八(平10)・六)
- (3) 足立巻一「解説—新聞小説として」(『松本清張全集』25—かげろう絵図、文藝春秋、一九七二(昭47)・一一)
- (4) 「狎」という犬は、大奥という特殊な環境にあつては特別な意味を帯びていたという。邦光史郎「江戸城(大奥の謎)—教科書にはでてこない歴史の裏側」(光文社、一九八九(平1)・一)の第三章、参照。
- (5) 長局には四棟の長屋があつたという。三田村鳶魚「御殿女中」の「御殿女中の研究」(十二)には「部屋は、一の側には御年寄、二の側に御客会釈・御錠口、三の側・四の側に表・使などが住みます」と説明されている。
- (6) 孫兵衛桃野は「鼠璞十種」第一(大6)の鳶魚の「崖略」によれば、「著者鈴木夔、通称孫兵衛、桃野、桃花外史、酔桃子の号あり、化政の聞人御書物奉行鈴木岩次郎、名掛、号白藤の長子にして、古賀茶溪の伯父なり」とある。
- (7) 竹尾善筑は、やはり「鼠璞十種」第一(大6)の鳶魚の「崖略」によれば、「幕府の典故に精通せし覚斎竹尾善筑の著なり。(…)山県大弐の長子次郎衛、母氏に憑り斎藤好春といふ、その子次春はじめて雑染して増上寺にあり、後に帰俗して幕府に仕へ表坊主となる」という。
- (8) 「樹の下露(新見伊賀守正路文化十年作)」の末尾には次のようにある。「(…)再び発してのち、日出度水のかゝるやうに成りぬ、末は清きながれにて、河骨、杜若、おもだか、其ほか水草あまたあり」。
- (9) 『天保図録』の「2 烏頭大黄」の章に「また真田幸貫は早くから老中就任の運動をしてきたもので、家斉が生きているころしきりと中野硯翁に賄賂を贈っていたが、さんざん搾られた末、大坂城代の経歴なくして御用部屋にはいった先例がないと突き放された人物である」とある。
- (10) 鳶魚のいう「女探偵」が登場する「延命院事件」を扱ったものに、河竹黙阿弥の「享和政談」(「延命院」とも。『黙阿彌全集』第一四巻、春陽堂、一九二五(大14)・六、所収)がある。鳶魚も『江戸の女』で引用しているが、この「享和政談」はさほど「かげろう絵図」には反映していないようである。その点では坪内逍遙鑑選『近世実録全書』第二巻(早稲田大学出版部、一九一七(大6)・七)に収められている「延命院実記」も同様に影響の跡は見られない。
- (11) 注(3)に同じ。